

## 太宰府天満宮仮殿

太宰府天満宮御本殿の大改修が行われている3年の間、祭神である天神様は特設の仮殿にお鎮まりになる。天神様は、平安時代(794年～1185年)の先端をいく学者であり詩人であり政治家でもあった菅原道真公が神格化されたものである。

御本殿の改修においては、その工事期間における神様のお住まいとして仮殿が必要とされる。そのため多くの神社は一時的な社殿を建てて、大体の場合それらは簡素で単純な造りとなる。太宰府天満宮の現代的で印象的な仮殿は、それゆえに稀有な存在である。

この仮殿の設計をした藤本壮介氏は受賞歴のある建築家で、型通りではない形状と構造の作品で知られている。仮殿を造るにあたって、彼は道真公の左遷に関する感動的なエピソードから着想を得た。天皇が無実の罪で道真公を太宰府に追放した際、彼の愛した梅が彼の不在を寂しく思い、京都から太宰府へと飛んで移動したというお話である。その梅は「飛梅」として知られるようになった。この伝承にちなんで、藤本氏は仮殿の屋根の上に「森が浮かんでいる」ようなデザインを施した。そこから芽吹く60種類の植物の中には、神社境内に生えている約6,000本の中から選ばれた梅の木も含まれている。ウメ、サクラ、カエデ、クスノキなどの木々は、一年を通して花を咲かせたり、色を変えたりして、常に変化し続ける森を作り出している。藤本氏はまた、周囲の山々に溶け込むように曲線を描く屋根など、御本殿の建築的特徴も取り入れた。

御本殿内部の調度品や備品は修復中だが、仮殿には新しい几帳や御帳などの装飾品が必要とされた。そこで、パリ・ファッション・ウィークにも度々参加しているファッションデザイナーの黒河内真衣子氏にデザインを依頼した。黒河内氏が手がけたのは、神様のいらっしゃる場所と人との空間を仕切る幕「御帳(みとぼり)」と、装飾的な調度品として使われる2点の絹の間仕切り「几帳(きちょう)」である。御帳には太宰府天満宮の象徴である梅の花があしらわれている。几帳には、伝統的な染めの絹糸に現代の化学繊維を織り込んだ。染色技法は、境内で採れる梅の花や楠の枝から色をとる形で行われた。

古代と現代が融合したこれらのデザインは、詩的才能だけでなく、先進的な行政政策でも知られた道真公のクリエイティブ・スピリットを体現したものである。また、藤本氏や黒河内氏といった一流のクリエイターを起用したのは、芸術の祭神としての天神様に敬意を表してのことだ。

2023年5月に完成した仮殿は、御本殿の改修が完了するまでの3年間使用される。そ

の時には仮殿は解体され、仮殿を飾る木々や緑は境内の森へ移植され、未来へと生き続けることになる。